

グループホームにおける支援とは ～Aさんの実践から～

ホーム支援課 山田真理子

1. はじめに

しが夢翔会のグループホームには、今 41 名の方が入居されています。その中には、成長過程で親からの養育が十分に得られず、人との関係を築いていく上で色々な事に躓き、生きづらさを抱えた方がおられます。そういう方への支援について、実践してきた事を紹介したいと思います。

2. Aさんの事

① プロフィール

女性 43 歳 療育手帳 B2 障害程度区分 4

幼少期に両親からの養育が十分に得られず、児童養護施設の入退所を繰り返す。

2011 年 父の急逝に伴い B グループホームに入居

2018 年 4 月から担当支援員変更になる。

2020 年 ホームを退居し、一人暮らしになる。

② Aさんの課題

- ・身の回りのことや買い物やスマートフォンを使ったりする力はある。愛着形成がうまくいかなかったことから、自分の思う通りになる人を作る事で、自分の中の不安を埋めようとする傾向があり、支援者やキーパーに自分の要求や不満を言う事が自分で止められなくなり、支援者やキーパーとの関係が悪化せざるを得ない結果となっていた。

- ・外出支援に入るヘルパーに対しても同様で、自分の納得できない対応だった場合、次の支援からそのヘルパーを受け入れないという選択をするため、支援に入るヘルパーが限られてしまう。

- ・ホーム内での他利用者に対しても、自分の要求を通そうとし、相手への束縛が激しかったり、キーパーを独り占めしたいがために、他利用者を遠ざけてしまう事があり、他利用者が本人を受け入れづらくなってしまっていた。

- ・上記の事から、本人の中で不安や孤独感が大きくなり、悪循環になってしまっていた。

2018年から担当支援員が変わり、以下のような支援を積み重ねていくこ

とで、本人に少しずつ変化がみられるようになってきた。

③ Aさんへの取り組みと結果

○Aさんの住むフロアをAさん一人にして、他入居者との距離をとってもらった。

⇒他入居者と距離を置いた事で、他入居者が精神的にしんどくってしまう事がなくなり、物理的に頻繁に他入居者と合わないため、たまに他入居者と直接他愛もない話で盛り上がる事があると嬉しそうにしていた。

○本人が見通しを持つ事で、安心できるようにした。

⇒毎日この時間にはキーパーが来て少し話をしてくれる事を伝えた事で、安心できるようになった。また、キーパーに要求や不満を言う事が減り、他愛もない話で盛り上がる機会も増えた。一方で、自分の要求や不満を話すキーパーが固定化されてしまい、そのキーパーへの精神的な負担が大きくなってしまった。

○支援において、キーパーと支援員の役割分担をした。

⇒キーパーが本人から言われた事で、対応に困った事があればすぐに連絡をくれるようになった事で、支援員がキーパーと本人の間に入り、キーパーから本人に言いづらい事も、支援員からメールで本人に伝えるようにしたので、キーパーが一人で対応方法に悩む事が少なくなった。今まで、本人が悪くても絶対謝らなかったが、場合によっては、キーパーから距離をとってもらうようにし、クールダウンできるようにした事で、謝れるようになった。

○スキンシップを大切にしながらも、メールも支援方法の一つとして大切にしました。

⇒本人と支援員との直接のやり取りは一週間に一回の入浴介助の後の面談の時のみで、それ以外はメールでやりとりをするようにした。面談時に直接何かを注意する事は本人が自分を守ろうと感情的になってしまうため、メールと面談でやりとりする内容を区別し、直接本人に何かを注意する事を止めた事で、お互いに冷静にやりとりができるようになった。本人とのメールのやり取りの中で、支援員自身の気持ちの整理がつかない時は面談はしないようにし、直接本人との関係が崩れてしまう事を避けるようにした。面談の時は、終始他愛もない話で終わる事もあったが、たまに真剣に本人の課題や支援内容、本人の変わってきた姿を直接話す事で、しっかり自分の事を考えてくれている実感を持つ事が出来た様子だった。本人は褒められる事は慣れておらず、いつも「そんな事ない。私は変わってない」と照れている様子が見られた。支援員へのメールは、ホームに対する唯一の本人の不満や要求を言えるアイテムととらえ、受け止めていくようにした。返信は不満への返答は

せず、意識的に他愛のない内容にとどめるようにした。返信が必要な内容に対しては、ホームで対応できる事、できない事を明確に返答するようにした。

○本人にとって、楽しい体験を重ねる。

出来るだけ、楽しかったと思える経験をヘルパーとしてもらえるようにした。ヘルパーが本人の対応の中で困った事があったら連絡してもらおうようにし、支援員がアドバイスするようにした。また、ヘルパーとは、大阪や岡山に遊びにいたり、コンサートに行った。また、友人と二人で京都に出掛けた時には、電車の乗り方など、一緒にネットで調べ、外出先で何か困った事があったら支援員に電話するようアドバイスする事で、不安なく友人との外出を楽しめるようにした。

⇒支援者と楽しい経験を重ねる事で、外出から帰ってきてから、支援員に「楽しかった～」と電話で報告してくれることも出てきた。本人の対応で困っているヘルパーには、アドバイスをすることで、本人からヘルパーを拒否する事が少なくなり、ヘルプに入れるヘルパーが減ってしまう事が少なくなってきた。友人との外出は、友人と一緒にいきたい場所を決めたり、本人も自分が一度行って楽しかったから連れて行ってあげたいという事で行先を決めたりした。支援員と一緒に電車の乗り継ぎ方を調べたり、駅員さんに聞いたりして一緒に楽しく行く事が出来た。友人を大切にしているいい面があり、友人がしんどくなってしまいそうな夏の暑い時期に行くのは止めると本人から言って来る事があった。

○チームとしての支援

・月1回、精神科の訪問看護師や相談員、補助人による面談を設定し、その中で本人の不満や不安を聞いてもらう事で、本人だけでなく、ホームのキーパーや支援員への精神的な負担の軽減が図れるようにした。

⇒本人が相談する相手によって、相談内容をしっかり使い分けており、その中で自分の気持ちも聞いてもらった事で、本人も相談できる相手が増え、支援員やキーパーの精神的な負担の軽減に繋がった。内容によっては相談内容を支援員と共有し、複数の関係機関で相談内容について、協議しながら進める事が出来た。

・通所先や相談員、補助人、主治医との連携を密にし、定期的なケース会議を持ち、各関係機関での支援内容の共有をはかり、支援者自身がやっている実践の方向性を再確認する場とした。また、本人を交えてのケース会議では、本人の不満や要求を聞く場とした。

⇒本人を交えたケース会議では、本人の気持ちを聞く場とした事で、本人自身が自分の気持ちをみんなに聞いてもらえたという実感が持てるようになった。また、本人を交えないケース会議では、各関係機関の支援者自身が孤

独感を感じる事が避けられた。また専門家から、自分たちの実践を続けていく事がいいのでは？と評価を貰った事で、「自分たちがやっている実践を続けていても大丈夫だ」という安心感に繋がった。

④ 実践を通して、Aさんの変わった姿

・取り組みを始める前は、自分の寂しい気持ちを素直に伝えられず、周りの支援者に自分の要求を通そうとし、それで周りが本人を避けるようになり、より本人の孤独感が高まってしまっていたが、一人暮らしを始めてから、支援者に素直に「さみしい」と本当の気持ちを伝えられるようになっていた。

3. Aさんの実践から

一人で抱え込まず、他機関との連携することで、支援にゆとりが出来、客観的に自分たちの支援の振り返りや役割についての確認が出来るようになった。また、本人支援について、しっかり本人に向き合い、少しずつ関係性を築きながら、本人にとって必要だと思うことを丁寧に伝えてきたことが本人にとっては、受け止めてもらえているという実感に繋がったのではないかと思われる。キーパーが本人の攻撃の対象にならないよう、支援員との役割を分担したことで、キーパーと支援員との信頼関係も深まり、本人との距離感も適切なものとなった。そのことで本人も謝ることが出来るようになり、謝ることが出来たことを評価してもらうことで本人の自尊感情も高まっていったのではないかと思われる。

その後も、ホーム支援課全体では、ネグレクトの状態で育ってきた10代、20代の二人の方が入居してきている。

課題はそれぞれに違うが、今回の実践で得たことを共有しながら、今後の実践に生かしていきたい。